壁のない景色

昭和町立押原中学校三年　古屋　陽梨

「隠せ」

この言葉は、どんなときも出身を隠して生きなければならない、という父から丑松に与えられた教えだ。私は現代にも繋がる人権問題を、今から百年前に島崎藤村によって書かれた「破戒」から学んだ。

「破戒」とは、明治時代後半の長野県を舞台にした物語だ。主人公の瀬川丑松は、地元から離れて長野の山奥の小学校で教師をしていた。彼は誰にも知られてはいけない秘密を抱えていた。それは、「自分が穢多出身である」ということだ。なぜなら、それを知られた途端に軽蔑され、社会から放逐されるからである。丑松は憤りを抱えながらも、誰にも心を許すことができずに生きていくのであった。

しかし、ある思想家との出会いをきっかけに偽りのない生き方への憧れと、破ることのできない戒めとの葛藤に思い悩むことになる。そしてついに、自分が穢多であることを告白してしまう。村にいることができなくなった彼はテキサスへと旅立つ、という部落差別を風刺した物語だ。

この本は遠い時代に描かれた作品であるにもかかわらず、なぜか共感できる自分がいた。私自身が身分について悩んだ経験があるわけではないが、現代にも通じるものを投げかけていると思った。身分による差が『制度』として生まれたのは江戸時代であるが、この物語の舞台は明治後半である。解放令が出されてからかなりの年月が経っているはずだ。それなのに人々の差別意識は消えていなかったことを暗示している。現代から見れば、祖先の身分が就職先や進学に不利になる訳も、有利になる訳もないのは当たり前だ。そもそも差別がある時代で、誰が穢多になるべきなのか。その答えは出せないはずだ。

現在でさえも、共生社会の実現には至っていないのが現実だ。女性や高齢者、障がい者の人権問題、そして同和問題も未だ消えていない。法の下にあらゆる形態の全ての人に与えられる、永久に侵すことのできない権利、人権。しかし、一度植えついた心のバイアスを取り除くことは難しい。私も人と関わる上で分け隔てなく接するように努めていても背後に偏見が存在してしまうことは否めない。

私の学校には多くの仲間がいる。中学校に入学してから異性の友達も、障が

いを抱える友達も、国籍が異なる友達もできた。ポルトガル出身の女の子は気心が知れる仲になった。私の好きな英語を通じて趣味はもちろん、悩みも相談する。しかし初めからこうだったのではない。日本語が直接伝わらない人と話したことのなかった私は先生に勧められて心許なげに話しかけた。異言語で想いが伝わるのかという不安もあったが、当時の私は外国人に対して小さな心の壁があった。宗教、文化や習慣の違いから日本の生活ルールを守らないのではないかという偏見だ。その原因は、観光地でのゴミの置き去りなど、公共の場所でのモラル違反というニュースを記憶したからだと思う。一部の情報から、偏った見方をしてしまっていたのだ。しかし、彼女と接してからその思い込みは一八〇度変わった。彼女は敬語も使いこなすし、列では順序を守る。加えて誰よりも優しさをもっている。

移動教室の授業で私は準備が遅いため教室を出るのが最後になってしまうことが多い。それでも彼女が私を置いて先に行ったことはない。会話の中で日本語が伝わらない際は、しっかりとその意志表示をしてくれる。その度に、真摯に会話に向き合ってくれているのだな、と嬉しくなる。彼女は思い込みを超えることの大切さを教えてくれた。本当に自慢の友達だ。一部分を切り取った情報から固定観念を抱くのは可能性を粗末にしている。

未だ隔てが残るこの世界には、差別と闘う人、差別を利用する人、流される人、色々な人がいる。誰でも人権をもつ同等の立場にあるはずだが、相手より優位に立ちたいがために尊い権利が侵されるのは無慈悲すぎる。なぜなら、人を傷つけることを合理化したり、容認したりする根拠は絶対にないからだ。大切にするべきなのは、家柄でも、性別でもない。その人自身なのだ。肌の色が違おうが、不得意があろうが、同じ人間だ。だから誰もがかけがえのない存在であり、愛されるべき存在なのだ。

人は弱いから差別を生む。それはいつの時代も同じだ。永遠に未完成であるこの世界で、誰もが幸せに溢れる社会を実態のあるものにしていくのは私たちだ。素性を隠さず、ありのままが素敵だと笑って言い合える未来を拓いていきたい。